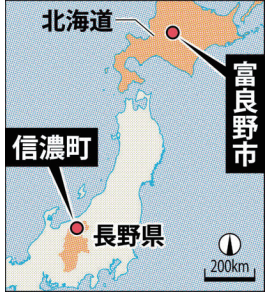
森と海からの手紙

★7便★

北海道・富良野

自然と共存 2人の先達



森づくりに、身をささげた2人の先達がいる。

北海道富良野市の東京大学演習林の林長として森の育成につとめ、「どろ亀さん」の愛称で慕われた高橋延清・名誉教授（享年87）と、長野県信濃町の「アファンの森」で、荒廃した森の再生に挑んだナチュラリストのC・W・ニコルさん（享年79）である。

稲穂が色づき始めた9月半ば。富良野市内で、トークセッション「どろ亀さん、ニコルさんの森づくりを語る」（市博物館、森づくりの仲間たち協議会主催）が開催され、両氏の思いを育む3団体の代表が出席。私も「ニコルさんの友人」として、同席の機会を頂いた。

緑復活へ「精神を引き継ぐ」

両氏と親交を重ねてきた脚本家の倉本聰さん（87）は、NPO「C・C・C富良野自然塾」の塾長として、ゴルフ場跡地に緑を復活させ、地球の環境や歴史について思索する森づくりを続けてきた。

ゴルフ場は、倉本さんが当地に移住後の1979年から27年間営業した。

「僕は、以前の豊かな森も知っていたので、『森に戻そう』と提案しました。その手始めに、跡地に残っていたシラカバの葉を数えたら、7万5000枚で、直径20メートルの円になりました。酸素と水は命の源です。葉は酸素を作り、落ちて大地に水を蓄える。だから、森づくりの基本は、葉っぱを増やすことですよ」

倉本さんと塾生らが、森づくりに込めた思いである。

除草剤で汚染されたゴルフ場跡に芽吹いた幼木や実を集め、育苗して移植。20年近い歳月を経て、シカやキタキツネが暮らす森になった。

「訪れた人には、まず裸足になって、目を閉じて歩いてもらい、五感を解放して森の息吹を体感してもらいます」

コース跡には、「46億年地球の道」が設営してある。1億年間を10メートルに設定し、全長は460メートル。「マグマの海」と呼ばれた原始時代は、有珠山から運び込んだ溶岩を赤く塗って並べ、1億3000万年ほど続いた13メートルの「恐竜時代」には、体長30メートルの恐竜の足跡が掘ってある。

「恐竜の頭は、あの木の高さです」。案内役の自然塾のスタッフが教えてくれた。

哺乳類が登場した2億3000万年前は、ゴールの23メートル手前。ホモ・サピエンスが登場した30万年前は、わずか3センチ手前になる。

「産業革命から現在までは0・02ミリで、人間は短期間に地球環境を激変させた。じゃあ、未来のために何をすべきか、みんなに考えてほしい」

スタート地点に設置された地球のオブジェは、地殻構造が分かるように造作され、訪れた人々が、宇宙からの視座で見つめる工夫が施されている。そして、ゴールの石碑には、倉本さんのメッセージが記してある。〈地球は子孫から借りているもの〉

⬆ゴルフ場跡地に設営された「地球の道」⬇見渡す限り緑が広がる東大演習林＝いずれも北海道富良野市で

〈森には　何ひとつ無駄がない　植物も動物も微生物も　みんなつらなっている　一所懸命生きている　一種の生き物が　森を支配することのないように　神の定めた　調和の世界だ〉

どろ亀さんの詩の一節だ。教授の肩書がありながら、大学の教壇に一度も立つことなく、常に森に身を置き、泥まみれになって「森づくり」を探求した姿は、没後20年を経た今も語り草になっている。

演習林は、東京の山手線の約3・6倍もの広さで、どろ亀さんは、それぞれの場に適した伐採する木の選定と量を決定する「林分施業法」を提唱。経済効率性を優先し、豊かな広葉樹林を杉やヒノキの森に変えてきた当時の林業行政に一石を投じた。

「森と人の共存の道を学びたければ、研究室を出て森の木々から教わることだ、というどろ亀さんの『森づくりの思想』は、継承されています。伐採時は、スタッフが森の中で、森の未来の姿を想像することから始めています」

セッションに参加した、尾張敏章・現林長の言葉である。

アファンの森からは、「アファン財団」の森田いづみ理事長（66）が駆け付けた。

2年前の春に逝ったニコルさんから理事長を引き継ぎ、スタッフとともに森の維持に努めながら、将来構想を模索。ヤブとツルが密集する薄暗い森は、154種の動植物が息づく「ノアの箱舟」のような空間になった。

森田さんはセッションで、今の思いを語った。

「ニコルは、松木信義さんという地元の森の達人と二人三脚で、試行錯誤を重ねて再生に取り組みました。そんな2人を見て、どろ亀さんは『2人が森で議論している限り、森は大丈夫だ』という言葉を残されました。ニコルが去り、松木さんも退職されたいま、スタッフ全員で、その精神を引き継ぎたい」

紀元1年に3億だったと推定される人口は、現在約80億人。生命を育む緑の森は激減し、温暖化などの気象変動の一因とされる。そんな時代を、我々は生きている。

【客員編集委員・萩尾信也】

＝毎月第3火曜掲載